

# 「グループワークによる情報リテラシ教育の手法について」

## 特集号の発行にあたって

関根 純<sup>†</sup>  
Jun SEKINE<sup>†</sup>

魚田 勝臣<sup>‡</sup>  
Katsuomi UOTA<sup>‡</sup>

<sup>†</sup> 専修大学 経営学部

<sup>‡</sup> 専修大学 名誉教授

<sup>†</sup> School of Business Administration, Senshu University

<sup>‡</sup> The Professor Emeritus, Senshu University

経営学部では、情報教育について、2007年度のカリキュラム改定時より、「情報処理入門」、「情報システム入門」、そして「情報リテラシ基礎演習」という3科目の構成として推進していくことにした。このうち「情報リテラシ基礎演習」では、情報リテラシに関する教育を推進することにし、各クラスは50人程度の小規模クラスの実習主体の講義とし、そのために教科書（文献[1]）を整備して統一的な手法で実施してきた。現在では本科目は14展開し、関わる教員も10人となっている。このような取り組みを通じて得られたノウハウは、新しい情報教育の方法などについて議論する情報科学研究所主催の「情報教育研究会」において毎年、共有されてきており、各教員のスキル向上にも役立っている。そこで、これまでに得られたノウハウを体系化し手法としてまとめた「グループワークによる情報リテラシ～情報の収集・分析から、論理的思考、課題解決、情報の表現まで」を2015年10月に上梓し、2016年度より新たな教科書として活用している（文献[2]）。本特集号では、この教科書に示した情報リテラシの手順、およびこのような手順を構成するに至った考え方やノウハウを示すことにした。

情報リテラシの考え方にはさまざまなものがあるが、本科目では、情報リテラシを人間の情報活動に関する能力と捉えている。このように捉えると、情報の収集・分析から、論理的思考、課題解決、情報の表現について学習するべきと考えている。企業や役所などでは日常的に行われている活動に対応する。つまり、社会に出ると真っ先に必要となる能力に他ならない。しかし、系統的に学んだ手法に基づいて行動しているかと問われると、自信がない人も多いと思われる。とくに、高校生や大学の初学生は、何となく不安に感じていることと思われる。本科目では、それに応える手法について学習する。また、企業や社会ではひとりで活動する機会は少なく、ほとんどの場合チームを組みグループで活動を行う。それに応えるため、本手法ではグループワークを用いる。これにより、協調性やリーダーシップが育まれると考えている。

本手法は、具体的には、情報リテラシとは何かを理解した上で、チーム活動のための準備をし、情報の収集と整理をした後、問題の発見と情報の分析を行い、さらには解決案を創出し、最後にレポートを作成したりプレゼンテーションを行うことで情報を表現するという手順となっており、本特集号もその手順に従った構成となっている。また、科目では、学生にインセンティブをもたせグループワークの効果を最大限に発揮してもらうためにディベートを活用していることから、ディベートについても述べている。

本特集号が、経営学部における情報リテラシ教育の手法の理解の一助となれば幸いである。

最後に、情報リテラシ教育に関するノウハウを提供し、教科書の執筆にも参画していただいた情報教育研究会をはじめとする関係者の皆様、教科書の発刊に多大なるご支援をいただいた共立出版の石井徹也さまに深く感謝申し上げます。

### 参考文献

[1] 魚田勝臣, 大曾根匡, 荻原幸子, 松永賢次, 宮西洋太郎, “ITテキスト 基礎情報リテラシ 第3版,” 共立出版, 2008.

[2] 魚田勝臣, 渥美幸雄, 植竹朋文, 大曾根匡, 関根純, 永田奈央美, 森本祥一, “グループワークによる情報リテラシ,” 共立出版, 2015.

